

ヴェーバー社会科学の方法（２）

——「社会科学のおよび社会政策的認識の『客観性』」の考察——

Weber's Method of Cultural Sciences, especially of Economics (2)

笠原俊彦

要 約

ヴェーバーは、経験科学がなしうる「価値判断の批判」として、五つをあげる。(1) 所与の目的に対する手段の適合性の批判、(2) 手段の適合性の確認にもとづく目的の実践的意味の批判、(3) 随伴の結果の確認にもとづく意図的行為の批判、(4) 価値とこの基礎としての理念との確認、(5) 価値と理念との内的無矛盾性の批判、がこれである。ヴェーバーによれば、経験科学は、このような批判によって、行為者に対し、かれが首尾一貫するためには如何なる価値基準にもとづいて如何に行動せざるをえないかを自省する手助けをすることができる。だが、如何に自省し行動すべきかの決断、これは、行為者がなすべきことであり、科学がなすべきことではない。

5 理想と価値判断との科学的批判

ヴェーバーは、次のようにいう。

「意図的になされる人間の行為 (sinnvoller menschlicher Handeln) の最も基本的な要素を熟考するとき、ひとは、常に、まず、『目的』と『手段』という範疇を考慮せざるをえない。なぜなら、人間は、その意図的行為において、具体的な何かを欲するのであるが、かれがこれを欲するのは、これが、(かれにとって — 笠原) それ自体として価値があるためであるか、または、これが、最終的にかれが欲するものにとって役に立つ手段であるためであるかの、いずれかだからである。」(S. 149.)

ヴェーバーのこのような論述について、われ

われは、人間がそれ自体のうちに価値を認めて欲するものが「目的」であり、人間が最終的に欲するものを得るために役立たせるものが「手段」である、というヴェーバーの考え方を理解することができるであろう。

もっとも、目的と手段とに関するヴェーバーのこのような論述については、われわれは、かれが「人間が最終的に欲するもの」というとき、これと区別して「人間が中間的に欲するもの」を想起することができる。この場合には、われわれは、「人間が最終的に欲するもの」(最終目的)を達成するための手段が、さらに、この手段を達成するための手段の目的(中間目的)になるという、目的と手段との、いわば階層的な連鎖を考えることができるであろう。だが、こ

のようなことは、ヴェーバーがここで問題にしようとするのではない。ヴェーバーにとっては、ここでは、とりあえず、人間の意図的な行為の要素として「目的」と「手段」という二つの範疇が見出されうること、このことのみが問題なのである。

ヴェーバーは、この二つの範疇について、価値判断の科学的批判、より正確に言えば「諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判」、ないしかれのいわゆる技術的批判、の第一のものを示すことになる。

(1) 所与の目的に対する手段の適合性の批判

ヴェーバーは、次のようにいう。

— 人間の意図的行為について目的と手段という二つの範疇が見出されるとき、ひとがまず科学的に考察しうるものは、当然のことではあるが、与えられた目的に対する手段の適合性 (Geeignetheit) の如何、これである。ひとは、その時々のかれの知識の限界内で、ある与えられた目的の達成にとってどのような手段が適合的であるのか、またはないのか、を有効に (gültig) 確認することができる。(Vgl. S. 149.)

このようなヴェーバーの論述から、われわれは、かれが、意図的になされる人間の行為の基本的要素としての目的と手段との関わりについて、「諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判」として、第一に、与えられた目的に対する手段の適合性の確認ないし批判をあげていることを知ることができる。

ここにいう手段の適合性の確認を、われわれは、ある手段が、与えられた目的をはたして達成することができるか、できないか、の確認のみならず、それが、その目的をどのように、そしてどの程度まで、達成することができるか、

できないか、の確認をも含むものとして理解することができるであろう。

それだけではない。われわれは、ここに考察の対象とされうる手段が、ある実践主体がその目的を達成するために現実に用いている、あるいは用いようとしている手段のみならず、その他に、かれが用いうる手段をも含むものとして理解することができるであろう。しかも、われわれは、この後者の手段のうちに、与えられた目的を達成する可能性を明らかにもつと思われる手段のみならず、一見したところこのような可能性をもたないと思われる手段をも含めて考えることができる。

このようにいうとき、われわれは、すでに、ある意味での存在の認識を超える領域に踏み込んでいる。われわれは、ここでは、すでに手段として用いられており、または手段として意識されており、この意味において存在しているもの、についての認識のみならず、これ以外に、実践主体によっていまだ手段として用いられておらず、または意識されておらず、この意味において、いまだ存在していないが、手段となる可能性のあるもの、についての認識をも述べているからである。ここに手段となる可能性のあるものの認識が、広義において手段の開発を意味することは、いうまでもない。そして、このような開発をなすとき、ひとは、これによって達成されうる目的としての価値に、実質的に加担していることになる。

もっとも、この場合、われわれは、次のことに注意しなければならない。それは、与えられた目的に対する手段の適合性の如何を、何らかの実践主体が達成しようとしている目的に対する手段の適合性の如何として理解するとき、この適合性が、この実践主体が置かれている状況

に依存すること、これである。ここにいう情況を構成する要因として、われわれは、少なくとも二つをあげることができる。その一は、当該情況においてその実践主体がとりうる手段であり、その二は、この情況において手段の目的達成効果に作用しうる諸要因、すなわちこの目的達成効果を妨げうるまたは促進しうる諸要因である。

情況を構成する以上二つの要因は、もちろん、歴史的に相違する。そこで、この場合の所与の目的に対する手段の適合性の批判は、少なくとも以上二つの要因を含む歴史的情況に照らしてなされなければならない。そして、このような批判が、このような情況についてのわれわれ研究者の知識にも依存し、これによって制約されることは、ここでとくにいうまでもないことであろう。研究者が自らこのような制約を知り、これをできる限り緩和すること、ここに、ヴェーバーのいう実践的問題に対する判断ないし批判の修練の一つが存在するものと思われる。

さて、われわれのこのような論述は、研究の実際においては、すでに、ヴェーバーが技術的批判の第二のものとして説明することがらに、一步踏み込んでいる。

（2）手段の適合性の確認にもとづく目的の実践的意味の批判

ヴェーバーが、人間の意図的行為における基本的要素としての目的と手段とに関して述べる「諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判」の第二は、目的の実践的意味の批判ないし確認である。ヴェーバーによれば、所与の目的に対する手段の適合性の如何が確認されるとき、このことから逆に遡って、そこに所与とされている目的そのものが実践的意味をもつ

か否か、の批判ないし確認がなされうる。

ヴェーバーは、手段の適合性如何の批判を述べた文章をそのまま続けて、次のようにいう。

—— 上述したような、所与の目的に対する手段の適合性の確認がなされるとき、研究者は、これにもとづいて、利用可能な特定の諸手段によって特定の目的を達成する見込みがそもそも存在するの否かを知り、このことによって、間接的ながら、その時々¹の歴史的情況を考えると、そもそも、行為者がそのような目的を設定したこと、これ自体が、実践的に意味あるもの（sinnvoll）であったのか、または、その時々²の情況からして実践的意味を有していなかったのか、についての批判をなすことができる。（Vgl. S. 149.）

われわれは、ヴェーバーのこのような論述について、かれのいう「利用可能な特定の諸手段によって特定の目的を達成する見込み」の考察が、この諸手段によって、そもそも所与の目的が達成される可能性があったか、それともなかったか、の考察これだけではなく、その可能性がどのように、そしてどの程度あったか、なかったか、の考察をも含み、したがって、このことからして、所与の目的の実践的意味の批判ないし確認が、単に、当該目的を設定したことの意味があったか、なかったか、の確認だけでなく、また、どのように、どの程度あったか、なかったか、の確認をも含む、と考えることができるであろう。

そして、この場合、われわれがさらに注意しておかなければならないことは、実践主体としてのその目的の実践的意味が、この実践主体が用いることのできる手段とこれに作用する諸要因とについて、この実践主体がこれらを知っていたか、または知りうる状態にあったか、この

ことのみならず、とりわけ、かれがこれらすべてをどのように評価したか、に依存すること、これである。われわれ研究者がここでなしていることは、ただ、われわれが知りうる限りでの当該状況からする、実践主体による目的設定の実践的意味の評価に関わる推測、これのみである。

このような推測は、さらに技術的批判の以下の諸項目に関わることとなる。

(3) 随伴的結果の確認にもとづく意図的行為の批判

さて、ヴェーバーは、人間の意図的行為の要素としての目的と手段とに関連して、また、次のように云う。

— われわれは、さらに、もちろん、常に、われわれのその時々¹の知識の限界内でのことではあるが、ある特定の目的を達成することが可能であるように思われる場合²について、この目的を達成するために必要な手段を用いることによって、意図された結果としての目的が達成されう³ことを確認しう⁴だけではない。われわれは、この場合、これとともに、次のもの⁵を確認することができる。それは、あらゆる事象 (Geschehen) のすべてが関連していることから生じることになると思われるもの、すなわち、意図された結果としての目的とは別個の、これと異なる諸結果 (F o l g e n) 、これである。これら諸結果は、当該行為者にとって望ましくないものをも含みうる。そこで、われわれは、意図されている結果としての目的とは別個のこれら諸結果を確認することによって、行為者に対して、その行為がもたらしうる、行為者が意欲する結果と意欲しない諸結果とを、比較考量する可能性を提供することになる。すなわち、われわれは、行為者が意欲する目的を達成する

ときに損なわれることが予想される他の諸価値という形 (Gestalt) での犠牲を示して、行為者に自らの行為の目的達成とこれに伴う犠牲とを比較する可能性を与えることができるのである。(Vgl. SS. 149 ~ 150.)

ヴェーバーのこの論述において、われわれは、人間の意図的行為における基本的要素としての目的と手段とに関する「諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判」の第三のものを見出すことができる。意図された結果としての目的の達成とともに生じうる、これとは別の諸結果、いわば随伴的結果、の確認と、これによる意図された結果と意図されざる結果との比較可能性の提供が、これである。

この場合、意図されざる結果としての随伴的結果の確認は、この結果が、どのように、どの程度生じうるか、の確認を含むであろう。そして、また、この随伴的結果は、当の実践主体ないし行為者にとって、かれが有する他の諸々の価値の何らかの犠牲という望ましくない結果を意味しう⁶だけでなく、これら諸価値への何らかの寄与という望ましい結果をも意味しう⁷ことが注意されなければならない。ただ、ヴェーバー自身は、ここでは、このうち、とりわけ、望ましくない結果を重視して、これを指摘しているのである。

ヴェーバーは、以上のことがらについて、さらに続けて次のようにいう。

— ほとんどすべての場合において、如何なる目的の追求も、この意味において何かを「犠牲にしており」、または犠牲にしうるがゆえに、いやしくも自らの責任を自省しつつ行為するひとは、かれの目的と、この目的のためにかれがとる行為がもたらしうる、目的以外の諸結果との、比較考量を無視することができない。

(Vgl. S. 150.)

そして、ヴェーバーによれば、この比較考量の可能性を与えることこそ、かれが以上において考察してきた技術的批判 (technische Kritik) の最も重要な (wesentlichst) 諸機能の一つなのである。(Vgl. S. 150.)

この場合、ヴェーバーが「技術的批判」というときの「技術」は、単に何らかの与えられた目的に対する手段、これだけを意味するものではないことがすでに明らかであろう。かれがここにいう「技術」は、目的と手段との関係のすべてを含むのであり、それゆえに、かれのいう「技術的批判」は、手段の批判のみならず、目的の批判をも含むのである。

われわれは、ヴェーバーのいう「技術的批判」が、広い意味での、いわゆる目的論 (Finalität) に相当することに注意しておくべきであろう。これは、ときに、単純に「技術 (Technik)」ないし「技術学 (Technologie)」と呼ばれ、また「技術論 (Kunstlehre)」とも呼ばれるのであり、また、しばしば、与えられた目的に対する手段の合理性のみを研究するものとして理解されることもある¹⁾のであるが、われわれは、ヴェーバーにおいては、それが単なる手段のみを論ずるものとしてではなく、手段との関連における目的、さらには目的そのものさえをも論じるものとして理解されていることに注意しなければならない。

それだけではない。われわれは、さらに、以下において、ヴェーバーのいう「技術的批判」が、かれによって、人間の意図的行為における基本的要素としての目的と手段とに関わる「諸々の理想および諸々の価値判断に対する科学的批判」のすべてを含むものとして理解されていることを、知ることになるであろう。

さて、この場合、ヴェーバーは、行為者の目的としての価値の実現と、この価値の実現のために行為者がとる手段がもたらす随伴の結果としての他の諸価値の犠牲との比較考量について、この比較のための可能性を与えること、このことと、この比較を実際になすこととを区別し、後者について、次のようにいう。

—— これを実際になすこと、これにもとづいて意志決定をなすことは、もはや科学のなしうる課題ではない。それは、意欲する人間としての行為者こそがなしうる課題である。行為者は、自らの良心とその個人的世界観とにもとづいて、かれに関わる諸々の価値を比較考量し、このなかからあるものを選び出す。そして、この場合、科学は、すべての行為が、そして事情によっては不行為もが、結果として、特定の諸価値への加担を意味し、このことによって、—— 今日ではとりわけ容易に誤解されるのだが—— 通常、他の諸価値への敵対を意味することを、行為者が意識するよう手助けをすることはできる。だが、如何なる価値を選ぶかの決定、これは、科学がなすべきことではなく、行為者がなすべきことである。(Vgl. S. 150.)

このようにして、われわれは、ヴェーバーが、何らかの行為の随伴の結果に関わる論述において、何らかの行為のみならず、さらには不行為をもとりあげて、これらがもたらしうるあらゆる効果を可能な限り考慮することが科学的研究の課題となりうる、と考えていることを知ることとなる。そして、ヴェーバーは、科学が、行為者に、何らかの目的としての価値のためにかれがとる何らかの行為あるいは不行為が、随伴的に他の価値に如何なる結果をもたらしかを明らかにし、この随伴の結果をも考えるとき、行為者の行為または不行為が如何なる諸価値へ

の加担を意味し、また如何なる諸価値への敵対を意味することになるかを明らかにすること、これをその課題の一つとしうることを指摘するのである。

しかしながら、ヴェーバーによれば、科学は、このことによって、諸価値を比較して何らかの特定の価値を選び、これを実現するために何らかの特定の行為をなすことの決定、あるいはこのような行為をなさないことの決定をなすことはできない。このような決定は、例えば、実践者ないし行為者自らが、その良心とその個人的世界観にもとづいて、かれに関わる諸価値を比較考量し、このうちからあるものを選び出し、さらにこれを実現しうる手段を選び出すことによってのみ、なすことができるのである。

この場合、ヴェーバーは、行為者の諸価値の比較考量が、その世界観にもとづいてなされることを述べているのであるが、ヴェーバーの「技術的批判」についてのさらなる論述は、まさに、このことに関して展開されることになる。

(4) 価値とこの基礎としての理念との確認

ヴェーバーは、かれのいう「技術的批判」として、さらに第四のものを理解する。かれは、次のようにいう。

— われわれが行為者の意志決定 (Entschluß) に対してさらになしうることは、行為者が意欲しているものと、これ自体が、行為者にとって如何なる意義をもつかを、行為者自身に自覚させるようにすることである。われわれは、行為者に、行為者自らが意欲している諸目的 (Zwecke)、このなかから行為者が何らかのものを選択するもとなる諸目的について、これらの関連と意義とを、何よりもまず、行為者の具体的目的 (der konkrete Zweck) の基礎となっ

ているまたはなりうる「諸理念 (Ideen)」を明らかにし、この関連を論理的に展開することによって、自覚させることができる。(Vgl. S. 150.)

ここにヴェーバーのいう、行為者自らが意欲している「諸目的」を、われわれは、むしろ、「諸価値 (Werte)」と呼び、行為者がこのなかから具体的に選ぶものを「目的」ないし「具体的目的」と呼んで、両者を区別するべきであろう。

ここにヴェーバーが述べていることは、行為者が意欲している諸々の価値のうち、まずは、かれが具体的に目的として設定する価値について、この基礎にある諸理念を、遡って明らかにすることから始めて、さらに、このような解明を、行為者の他の諸価値についてもなすことによって、行為者の諸価値と、これらがもつづく諸理念との関連、そして行為者の諸価値の間の、さらにはかれの諸理念の間の関連を行為者に自覚させることである。このことによって、行為者は、自らが意欲する諸価値、とりわけ、かれが具体的に目的として設定する価値について、それが自らにとってもつ意味を良く知ることができ、また、これらの諸価値が自らにとって如何なる意義をもつかを、より良く判断することができるであろう。

この場合、われわれが第一に留意しなければならないことは、ここにいう諸理念の解明が、ヴェーバーの論述においては、何よりもまず、行為者の具体的目的の基礎としての諸理念についてとりあげられてはいるけれども、具体的目的を含む、行為者が意欲する諸々の価値のすべての基礎としての諸理念についてなされうるし、また、必要とあらば、できる限りなされなければならないことである。

だが、それだけではない。われわれは、ヴェーバーのいうところからして、第二に、ここにいう諸理念が、行為者が現実にかれの価値の基礎として意識している理念のみならず、かれがこのような基礎として必ずしも意識していないにもかかわらず、実質的にこの基礎としていと考えられうる理念をも含むことに、注意しなければならない。ヴェーバーは、このような諸理念と諸価値との関連のうちに、行為者の諸価値の位置を明らかにしようとするのである。

このように、行為者の意欲する諸価値の位置が、その基礎としての諸理念との関連の解明にもとづいて明らかにされるとき、行為者は、自らが意欲しているある価値が、自らが意識しているある理念にもとづくものであることを、それまでも増して明確に意識し、しかも、この理念が他の諸理念とどのような関連にあり、自らが意欲している価値が、これら諸理念に対してどのような意味をもつかを知ることになるであろう。または、かれは、自らが意欲しているある価値が、自らが必ずしも意識していなかったある理念に深く関わり、あるいはこれにもとづくことを意識することができるかもしれない。そして、このとき、かれは、この理念を意識的に自らの行動原理とすることにさえるかもしれない。いずれにせよ、行為者の意欲する諸価値の位置が、その基礎としての諸理念の関連の解明にもとづき、これに関わらせて明らかにされるとき、行為者は、自らが意欲する価値が自らにとってのもつ意味と意義とを、より良く自覚することができるであろう。

この場合、われわれがさらに注意しなければならないことは、諸理念との関わりにおける諸価値の以上のような解明が、ヴェーバーが「技術的批判」の第三について述べていた、行為の

随伴的結果、そして不行為の随伴的結果のすべてについても、なされうるであろうし、また、必要な限りにおいてなされなければならないこと、これである。

それは、上に述べたように、行為者が意欲する諸価値のすべてについてなされうるだけではない。それは、さらに、かれが意欲する諸価値の実現行為によって作用することとなる、かれにとって望ましい他の価値、望ましくない他の価値（無価値あるいは反価値）、そして、かれがその不行為によって作用することとなる、かれに望ましい他の価値、望ましくない他の価値、についてもなさう。これらの価値を視野に入れて、この基礎にある理念にまで遡る考察がなされるとき、行為者は、何らかの価値を自らの行為によって達成することの意味と意義とを、さらに良く理解することができるであろう。

ヴェーバーは、諸価値の基礎としての諸理念を考察することについて、次のようにいう。

—— 一部は現実に追求されており、一部は追求されていると、そして追求されるであろうと想像されうるこれら「諸理念」を知的に (geistig) 理解することは、人間の文化生活を扱うすべての科学にとって、もとより、その最も重要な課題である。それは、「経験的現実を思惟的に整序 (denkende Ordnung der empirischen Wirklichkeit)」しようとする科学の限界を超えるものではない。精神的諸価値 (geistige Werte) をこのように解明するための手段として用いられる、通常の意味での「諸々の帰納 (Induktionen)」も同様である。(Vgl. S. 150.)

ヴェーバーのこの論述から、われわれは、諸価値の基礎としての諸理念の解明を、かれが、人間の文化生活を扱うすべての科学、すなわち

文化諸科学と総称される諸々の科学の、最も重要な課題として理解していることを知ることができるであろう。

この場合、ここに問題とされる諸価値も、そしてこれらの基礎としての諸理念も、いずれも経験的事実ないし経験的現実である。それゆえに、このような諸価値と諸理念との関連を思惟的に解明することは、「経験的現実の思惟的整序」を意図する経験科学としての文化諸科学がなしうることなのである。

このような諸価値と諸理念との解明は、ある価値がある理念に帰属させられうることの解明、ある理念が他の理念に帰属させられうることの解明、さらにはある価値が他の価値に帰属させられうることの解明を含むであろう。ここにあるものごとが他のものごとに帰属させられうる際、後者のものごとは、しばしば、前者のものごとよりも大きな一般的性質をもちうる。そして、あるものごとが、これより一般的なあるものごとに帰属させられうることの解明、これがヴェーバーのいう「通常の意味での『諸々の帰納』」であろうと思われる。しかも、これは、ここでは、経験的存在としての諸価値および諸理念についての解明として行われるものであり、それゆえに「経験的現実の思惟的整序」の一つに他ならない。

もっともこの場合、ヴェーバーによれば、諸々の精神的価値をこれらの基礎にある諸理念にまで遡って解明しようとする以上の課題は、たしかに、少なくとも部分的には、通常的分業的専門化 (arbeitsteilige Spezialisierung) における専門学科としての経済学の範囲を超えている。それらは、通常的分業的専門化における社会哲学 (Sozialphilosophie) の課題である。しかしながら、諸々の理念が歴史におい

て有する力は、社会生活の発展にとって著しく強力であったし、いまもなおそうなのであり、それゆえに、ヴェーバーによれば、かれらの雑誌は、上記課題を等閑にするわけにはいかない。かれらの雑誌は、むしろ、その最も重要な義務の一部として、この課題を引き受けなければならないのである。(Vgl. SS. 150 ~ 151.)

(5) 価値と理念との内的無矛盾性の批判

さて、ヴェーバーは、かれのいわゆる「技術的批判」について、さらに、次のようにいう。

「ところで、科学による価値判断の処理は、意欲されている目的およびこの基礎をなす諸々の理想 (Ideale) を理解し追体験することを可能とするだけではない。それは、さらに、とりわけ、これらを批判的に『判断する』 (kritisch beurteilen) ことを教えるものでもありうるであろう。ここにいう批判 (= 批判的に『判断する』こと — 笠原) は、もちろん、単に弁証法的性格 (dialektischer Charakter) のみを有しうる。つまり、それは、歴史的に与えられた諸々の価値判断と諸々の理念とのうちに存在する素材を単に形式・論理的に判断すること (nur eine formal-logische Beurteilung)、諸理想をそこに意欲されていることがらの内的無矛盾性 (die innere Widerspruchslosigkeit) の公準に関して検討することでありうるにすぎない。このような目的をもつ批判は、意欲者に、かれの意欲の内容の基礎に存在する諸々の最終的公理 (die letzte Axiome)、かれが無意識のうちにそこから出発しており、または — かれが首尾一貫するためには — 出発せざるをえないはずの、諸々の最終的価値基準 (die letzte Wertmaßstäbe)、を自省する手助けをすることができる。」(S. 151.)

この論述においてヴェーバーのいう「科学による価値判断の処理」が「技術的批判」を意味すること、そして、また、ここにいう「諸々の理想」が、かれがこれまでに述べてきた、そしてここでも述べている、「諸々の理念」と同じものであることは、いうまでもなく明らかであろう。かれは、ここでは、歴史的に与えられたものとしての行為者の諸価値、そしてこの基礎としての諸理念について、これらを「理解し追体験すること」だけでなく、これらを「批判的に『判断する』こと」が、経験科学としての文化諸科学の一つとしての経済学の課題であることを述べているのである。

ヴェーバーのこのような論述のうちで、歴史的に与えられた諸価値および諸理念を「理解し追体験すること」とは、歴史的・事実としての行為者の意識にあった、またはある、諸価値と諸理念、そして、さらに、行為者がその価値の基礎として無意識のうちに追求していた、またはしている、諸価値と諸理念とを、その最終的理念に至るまで確認することを意味するであろう。行為者が置かれていたまたは置かれている状況のなかで、行為者が意識的または無意識的に如何なる価値と理念とを追求しようとしていたか、またはしているか、これを行為者の立場に立って理解するよう努めること、これが、ここにいう「理解し追体験すること」に他ならないであろう。

ヴェーバーの論述のこの部分は、これに、随伴的結果についてわれわれが述べてきたものをも含めるとき、われわれが「技術的批判」の第四のものとして述べてきた部分に相当するであろう。そして、ヴェーバーは、これに続いて、ここでは、さらに、「技術的批判」の第五のものとして、歴史的に与えられている行為者の諸

価値および諸理念を「批判的に『判断する』こと」を付け加えているのである。

われわれは、ヴェーバーがここに第五のものとしてあげる諸価値および諸理念の「批判的に『判断する』」が、研究の実際においては、かれが第四のものとしてあげていた「技術的批判」と不可分に関わっていることを指摘しておかなければならない。両者は、ただ、論理的にのみ、区別されうるのである。このことは、「技術的批判」のすべての項目についていわれうることに注意されなければならない。

さて、ヴェーバーがここにいう批判的「判断」ないし批判は、歴史的・事実としての行為者の諸価値と諸理念とを論理的に分析して、まず、次のことを明らかにすることになると考えらるであろう²⁾。

- (a) これら諸価値と諸理念とのそれぞれの内容についての論理的無矛盾性の如何
- (b) これら諸価値のそれぞれとその基礎とされる諸理念との関連についての論理的無矛盾性の如何

だが、それだけではない。ここにいう批判は、一部には、とりわけ「技術的批判」の第四と結びついて、さらに進んで、次のことを明らかにすることになるであろう。

- (c) 行為者が意識的に追求する諸価値は、行為者の意識の如何にかかわらず、論理的に、どのような諸理念にもとづいていると考えられえ、または考えられざるをえないか
- (d) 行為者が意識して追求する理念からすれば、かれは、論理的には、どのような諸価値を設定しえ、または設定せざるをえない

と考えられるか

- (e) 行為者が意識していないにもかかわらず、かれが意識的に追求する諸価値からして論理的にその基礎にあると考えられざるをえない理念からすれば、かれは、論理的に、他に、どのような諸価値を設定しえ、または設定せざるをえないと考えられるか
- (f) 行為者が意識していないにもかかわらず、かれが意識して追求する理念からして、論理的に設定されうるまたは設定されざるをえない諸価値は、論理的に、他に、どのような諸理念にもとづくことができ、またはもとづかざるをえないと考えられるか
- (g) 以上の諸価値相互間そして諸理念相互間には、論理的にどのような関係が考えられえ、または考えられざるをえないか

そして、以上にもとづいて、われわれは、行為者に、かれが自らの行動において首尾一貫するためには、かれは、最終的にどのような諸々の価値基準にもとづいて行動せざるをえないかを自省する手助けをすることができるであろう。

註

- 1) このような立場から「技術論」を展開しようとした者の代表例は、E. ジーバーであろう。かれの学説については、次を参照のこと。

笠原 俊彦著 『技術論的経営学の特質』
千倉書房、1983年、第8章

- 2) われわれは、このような価値および理念の解明にもとづく一つの研究業績を、ヴェーバーがかれのこの論文と同時期に、かれが編集する同じ雑誌に発表した論文「プロテスタンティ

ズムの倫理と資本主義の精神 (Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus)」のうちに見出しうるであろう。この論文にいう「資本主義の精神」は、近代企業の諸々の活動の具体的諸目的の基礎にある理念としての指導原理であり、また、ヴェーバーによれば、この理念自体が、その生成においては、禁欲のプロテスタンティズム、とりわけカルヴァン主義、の諸理念に決定的に作用され、これを基礎としていたのであるが、その後、この基礎は、次第に、功利主義にとって代わられることとなったのである。

このことについては、次を参照のこと。

笠原俊彦著 『企業の営利と倫理——M. ヴェーバー研究——』 税務経理協会、平成15年11月

笠原俊彦著 『資本主義の精神と経営学』
千倉書房、平成19年7月

笠原俊彦稿「近代企業の指導原理——その生成と変容の意味——」『経営と経済』第86巻 第4号